

SHOW HEY シネマルーム

★★★



Data

監督：北村龍平

原作：高橋ツトム

出演：榎英雄/りょう/小雪

👁️👁️ みどころ

漫画家高橋ツトムがコミック誌に連載していた原作を、目下最も注目されている北村龍平監督が映画化したもの。死刑囚を主人公としたシリアスなテーマなので、期待したものの、「隔離」、「実験」、「魔女」、「異次物」などサッパリわからない。いろいろな「対決」が出てくるものの、退屈このうえない。『あずみ』（03年）で、ものすごいエンターテイメント作品をつくった北村監督もサッパリだ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<原作は高橋ツトム、監督は北村龍平>

原作は、集英社のコミック誌『週刊ヤングジャンプ』に1999年に連載された漫画家高橋ツトムの『ALIVE』。そして監督は、日本よりも先にハリウッドで注目された、目下売り出し中の監督、北村龍平。北村龍平が監督した『あずみ』（03年）は、新たなエンターテイメント時代劇として大注目されている。

そんな注目コンビによる作品である上、出演する女優が、今や注目の的となっている小雪とあのクールな美人女優のりょう。主役の死刑囚八代天周（やしろてんしゅう）を演ずる榎英雄はよく知らないものの、死刑執行にもかかわらず、「生き残った死刑囚が、その後、生きるか死ぬかの選択に迫られる！」というシリアスなテーマなので、これは絶対観ておきたい社会派ドラマだと思ってしまった。

<ちょっと違うぞ・・・>

死刑執行は絞首刑ではなくて電気イスだ。そしてその執行場へ連行される八代の手には

ちょっと変わった手錠、そして足には足かせだ。ちょっと待てよ……。何か少し私のイメージとは違う。つまり現実感がないのだ。なるほど分かった。これがコミック誌的な映画のつくり方なのだ。電気イスも現実離れたメカニックなものだし、手錠や死刑執行場も無機質な感じ。あれ、これは俺が思っていたような映画とは違うかな？と思ってしまった……。

<死刑囚は生きることを選んだが……>

「生きる方が死ぬことよりもよほどつらいことがあるぞ！」と脅されながらも、八代は「生きる途」を選択した。そしてその八代を待ちうけていたものは……。ここから先は、もう訳の分からない世界の展開となっていく。

まず、もう1人の生き残りの凶暴な死刑囚、榊藤がいる。閉ざされた空間の中で彼ら2人はある実験の実験台とされていたのだ。これを監視するのはプロの研究員達、明日香（小雪）もその研究員達の一員だ。彼ら研究員が研究しているものは「異次物」。そして、明日香の実の姉、百合華（りょう）は2人の死刑囚に絡む「魔女」だ。さらに研究員達のバックには、「国家安全顧問機関」なる得体の知れない組織が……。 「隔離」された生活が1日、2日……と進む中、八代や榊藤の意識や行動にはさまざまな変化が……。研究員達はこれを克明にリサーチしていく。そして数日後、「魔女」を見せられた榊藤は欲望をあらわに……。

<「異次物」の登場>

話はややこしくてよく分からない。もともと、あまり真面目に理解しようとする意欲もわかなくなっているが……。そして隔離生活12日目に至り、「異次物」という概念が登場する。魔女の百合華とはガラスで隔離されていたはずなのに、なぜか榊藤だけが百合華の部屋に入りこんでいた。そして百合華は恐怖におののき、八代に助けを求めたが……。

後はとにかく、この「異次物」がどう人間の中に入りこみ、人間の凶暴性や殺意と結びつくのかというお話しの連続。「哲学的」で「難解」な会話が飛び交う。他方、CG化されたスクリーンからは、まるで『マトリックス』を観ているような映像が次々と……。

<各種「対決」の行方は……？>

八代の異次物パワーをめぐって、学究派(?)の研究員達と得体の知れない国家安全顧問機関の連中達との対決が。そして最後には、もう1人の異次物パワーをもつ「化け者」と八代との対決。ここまでくれば、もうストーリーを追っていくのもバカバカしくなってくる。そして八代と化け者との「マトリックス的」対決にもウンザリ……。

<おじさんにはこの手の映画はダメ>

坂和おじさんにとっては、『マトリックスリローテッド』は特別観たいとは思わないものの、観ればそれなりに楽しい。しかしこの『ALIVE』のような、訳の分からない会話を延々と聞きながら、そして現実離れた「対決」シーンをスクリーン上でずっと見せられていると、さすがに嫌になってくる。この手の映画は私にはちょっと無理。勘弁してほしい。ジャンジャン。

2003（平成15）年6月25日記